社会教育と教師としての資質向上のために

宮内　秀貴

私は日頃から子どもたちと関わる機会を多くもつようにしている。教育のためというよりは私自身のためであるが、それらの活動には確かな教育的効果があると確信している。

私はＹＭＣＡという社会教育団体にボランティアリーダーとして所属している。対象は幼児から小学生、中学生、高校生と幅広いが、その中でも私は特に幼児と小学生を中心に活動している。具体的には、夏休みには赤城山で４泊５日などのキャンプ、冬休み・春休みには片品で３泊４日などのスキーキャンプ、その他の月は月一回の日帰りの野外活動を行っている。それらの活動において、子どもたちは４～８人で１つのグループを形成している。そしてそこにリーダーと呼ばれる私たちが、一人ずつついて生活するのである。この小人数集団での生活が子どもたちに多くの経験をもたらし、彼らを成長させていく。

人格形成に必要な価値は様々であるが、その中でも私たちが子どもたちに伝えようと注目しているのは「思いやり」「誠実さ」「責任感」「尊敬心」である。一人ひとりが「自分を大切にすると共に、自分以外の人を大切にする生き方を身に付ける」ことができるよう私たちは願い活動している。そしてこれらは決して押し付けになってはならない。子どもたち自身がこれらの価値に気づき、大切にしてくれるような間接的な働きかけや環境づくりにおいて、私たちリーダーの存在は大きな意味をもつ。リーダーとは言葉を換えれば、子どもたちの側にいる魅力的な大人のことなのかもしれない。私が最初に述べた教育的効果とはこのあたりのことである。しかし、そのためにはまず私自身が子どもたちの良きモデルでなければならない。私のみならず現職の教師、教師を目指す人、いや全ての人が子どもたちの良きモデルであるべきである。子どもたちにとって最大のモデルは保護者だからである。一人の人間として魅力的でありたいという想いや子どもが可愛くてたまらないといった想い、そして何よりそこで過ごす時間が楽しく居心地が良いという想いが、こうした活動に対する私のエネルギーの源である。

私は教育学部に通う学生である。よって、ここからはこれらの活動の中における私の教師としての資質の向上という点に絞って話を進めたい。活動が私に与える影響として一番大きいのは、やはり様々な子どもたちと関われるということである。私は活動に参加して３年になるが、これまで実に多くの子どもたちと接してきた。多くの子どもたちと関わることは、対象理解をする際の様々な観点を私に与えてくれる。それにより、一人ひとりに合わせた接し方の工夫などが可能になる。

最近では、自分の視野をより広くするために障がい児（ＬＤやＡＤ／ＨＤなど軽度発達障がい）の活動にも参加している。そこで学んだことがいくつかある。彼らは学級の大半を占める他の子たちと何ら変わらない。ＬＤはただ学び方が違うだけで、教師の配慮やちょっとした工夫があれば、学習に対する困難も軽減できるのである。

Learning Disabilities(学習障害)ではなく、Learning Difference(学び方が違う)。この言葉を知ったのも、活動に参加するために座談会に参加したり、勉強会を行なったりしてである。また障がい児と呼ばれる子をもつ保護者は、そうでない保護者と比べて私たちが行なっている一つひとつの活動に対しての要望が事細かである。そこから保護者の子どもへの愛情や活動に対する期待、自分の責任感などを感じる。大学での聴講よりも、実際に子どもた

ち・保護者と接すること、そのために学ぶことは、私にとって得るものが多くとてもよい経験となる。１学級に２～３人はいるという軽度発達障がいの子たち。教師となるのであれば必ず彼らやその保護者と関わる場面があるだろう。経験を経験で終わらせるのではなく、それを活かす努力をしていきたい。

それからスキーキャンプにおいては、インストラクターとしてスキーの指導を行う。そのために私たちは毎年、冬・春に３泊４日でトレーニングを積む。そこでは自分のスキー技術の向上とともに「子どものスキー」について理解を深める。「子どものスキー」というのは「大人のスキー」とは異なる。子どもはまだ筋力がなかったり体力がなかったりと、体が未熟であるため大人のように関節を曲げた滑りができないのである。子どもの自然のままの体勢が子どもにとっては正しいのであり、こういったことを理解せずに指導してしまえば、子どもにとって弊害にしかならず、子どもの将来性に満ちた才能の芽を摘んでしまうことになる。

スキーのレッスンを行なう際に考えるのは、何よりも「安全」とそれから如何に意欲を失わせずにレッスンを行なうかである。危険なことを子どもたち自身にも意識させたり、「成功体験」の積み重ねであったり、「誉めること」の大切さであったりと、これらは授業を行なう際のヒントにもなっていると私は感じる。体育などではかなり近いものがあるかもしれないが、他教科でも一人ひとりの意見をしっかりと受けること、成功体験を与えることや誉めることは意欲の向上につながるはずである。

「子どものスキー」を取り上げたのは、子どもは将来の可能性に満ちているということを強調したいからである。そしてそれはスキーなどスポーツに限らず、人格形成なども含めた広い意味においてである。その可能性に満ちた時期に子どもたちと密接に関わる教師という職業の重大さを私はスキーを通して強く感じたのである。

ここまで述べてきたように、私は課外活動に多く携わることで大学の講義だけでは得ることのできないものを得ることができた。たくさんの人たちとの出会いから、数々の貴重な経験、そして自己を高めることまで。教育学部において、私とともに活動をしている仲間もたくさんいる。私のように課外活動をしている人たちもたくさんいる。しかし、そのような活動を全くしていない人もたくさんいる。そういう学生には大学だけではなく、外に出ていろんな活動を積極的にしてもらいたいと私は願う。教育学部であり教師志望であるならば尚更に強く思う。学生のうちに多くの子どもたちと関わることは、きっとその人の宝になるだろう。もちろん学習指導力は最低条件ではあるが、私はそうした経験を積んだ人に教師になってもらいたい。子どもが好きで、子どもをよく理解していて、そして自ら良きモデルである教師。こんな教師が今よりも増えたら確実に教育の質は向上するであろう。そして私も、その一人になりたいと願う。